

# 家郷連係と商業ネットワーク

清末民初における潮汕商人と故郷の相互関係

蔡志祥（香港中文大学）著

林松涛（拓殖大学）訳

# 家郷連係と商業ネットワーク

清末民初における潮汕商人と故郷の相互関係<sup>1</sup>

蔡志祥（香港中文大学）著

林松涛（拓殖大学）訳

## 序

商人と家郷との関係は、二つの観点から理解することができる。第一は、商人が地方社会で果たしていた社会的機能は、結局のところ現代的な企業の発展を推進したのかそれとも妨げたのか、という観点である。とりわけ、協賛などの明らかに利益にならない活動に商人が資金を投じる場合においてである。第二に、家郷の文化資源やイデオロギーは商業の発展をいかに推進したかという観点である。余英時氏が指摘したように、明代以降、商人は、士紳に取って代わって族譜の編纂をはじめとして祠堂・学校・寺院・道路・橋梁などの建設といった社会機能の主なスポンサーや推進者となった<sup>2</sup>。15世紀頃になると、裕福な商人たち、とくに江南の塩商は、地方の社会福祉事業に従事し、宗族祠堂やその他公共施設を建設し、文化活動のパトロンになり、または科挙資格や官職を購入するために巨額の資金を投じた。商人が富を追求する最終目標は「士大夫」という身分を手に入れることにあった。つまり、士大夫を目指すために、非営利的な社会文化機能、士大夫身分の獲得に巨額の資金を投じたのである<sup>3</sup>。したがって陳其南氏が指摘したように、この最終目標は、商人が現代企業の発展に投資する動機を妨げることになったのである<sup>4</sup>。

その一方、文化資源とくに儒学や伝統的な家族意識は、華人の商業発展を促進し、基本的な労働倫理や創業精神を生み出したともいえる。宗族の一員や親類を雇うことは、伝統的な宗族との繋がりを企業関係に転用した代表的な例である<sup>5</sup>。こういった儒学的社会価値観とくに「孝」を重んじる観念は、徽州商人の「賠償問責」という承諾につながったこと

---

<sup>1</sup> この研究にあたっては、香港政府による研究資助局 Hong Kong Research Grant Council および日本大学経済学部中国アジア研究センターの研究助成を受けました。この場を借りて感謝いたします。

<sup>2</sup> 余英時（1987）『中國近世宗教倫理與商人精神』161頁、台北：聯經出版社。

<sup>3</sup> Ho, Ping-ti, “The Salt merchants of Yang-chou: a study of commercial capitalism in eighteenth-century China” in 于宗先等編集（1980）『中國經濟發展史論文集』第2巻1389-1450頁、台北：聯經出版社、（原作は *Harvard Journal of Asian Studies*, vol. 17, 1954）、及び 傅衣凌（1956）『明清時代商人及商業資本』福建人民出版社。

<sup>4</sup> 陳其南（1991）「明清徽州商人的職業觀與家族主義：兼論韋伯理論與儒家倫理」、陳其南著『家族與社會』296, 302頁（台北：聯經出版社）を参照。

<sup>5</sup> 余英時（1987）『中國近世宗教倫理與商人精神』153頁以下。

はDavid Faure氏が指摘した通りである。また、「父債子還（親の借りは子が返す）」といった文化的な制約は「孝」を重んじる徽州商人の錢莊の貯金者への文化上の保証にもなっている<sup>6</sup>。儒学的思想倫理を強く主張することは明清商人たちの成功の秘訣であったといえる<sup>7</sup>。商人たちは、地方宗族や地域社会における非経済活動を通じて社会的名声や信頼を獲得し、その上で商業ネットワークや信用を強めたのである<sup>8</sup>。

本論では、ある潮州のファミリー・ビジネス(family business)を取り上げ、商人が家郷で行った文化活動の背後に隠されている企業動機を検討し、商人の家郷への貢献は商業上の必要性や発展へのフィードバックであることを指摘したい。非経済的活動は事実上、商人・商客が資金を集め、忠実な管理者や従業員を募り、信頼できる商業ネットワークを構築することにつながった。ところが、経済環境の絶えざる変化、とくに移民政策の影響を受けて、商人と家郷との関係は家族的な関係から宗族的な関係へ変化していく。空間上・血縁上の距離は、商人が家郷で行った文化活動に新しい解釈を付与した。海外で家庭を築き、地域宗族の一員でなくなった海外商人が、祖先の家郷との間において、責任的な関係から任意のボランティア的な関係へ変化していくのである。

### 1. 乾泰隆から鬻利へ：前溪陳氏家族企業の発展<sup>9</sup>

「乾泰隆」およびその聯号（系列関係の屋号を持つ商店）は、19世紀の後半に、潮州饒平県隆都前溪村の陳氏という拡大家族（以下、「乾泰隆一族」と略称する）が設立したものである。この家族企業の発展は、設立初期（1850－70年）・横方向への拡張期（1870－1890年）・多元的な拡張期（1890－1920年）・解体再建期（1920－1950年）と四段階に分けられる<sup>10</sup>。

陳氏グループはもともと宣衣・宣明兄弟が、1850年代の初めに香港で設立した南北行輸出入会社であった。陳氏は前溪出身で、陳氏地域宗族の長房の貧しい拡大家族に生まれた。この拡大家族が冠婚葬祭の際に助け合う親しい仲だったと郷里では言い伝えが残されている。貧しい宣衣の家には家屋も土地もなかった。本人は郷民のために川から魚を捕る肉体労働者であった。現地の人々の話によると、長房の一部の人が貧困に耐えられず、当地で

<sup>6</sup> Faure(1994), *China and Capitalism*, p. 18, Hong Kong: Humanities Division, Hong Kong Univ. of Science and Technology.

<sup>7</sup> 傅衣凌(1956)『明清時代商人及商業資本』、唐力行(1993)『商人與中國近世社會』161、杭州：浙江人民出版社。Lufrano, Richard John(1997), *Honorable Merchants: Commerce and Self-Cultivation in Late Imperial China*, p. 179, Honolulu: University of Hawai Press.

<sup>8</sup> Brown, Rajeswary Ampalavanar (1996), *Chinese Business Enterprise*, p. 2, London, New York: Routledge.

<sup>9</sup> 特に明記しない限り、このセクションは拙稿(1995) “Competition among brothers: the Kin Tye Lung Company and its associate companies” in Brown, Rajeswary (ed.) *Chinese Business Enterprise in Asia*, Routledge, pp. 96-114に基づいている。

<sup>10</sup> 同上。ファミリービジネスの発展論についてはWong Siu-lun (1985), “The Chinese family firm: a model” in *The British Journal of Sociology*, vol. 36, no. 1, pp. 58-70を参考。

の1850年の蜂起に加わった。結果、陳氏一族は王朝に追討され、宣衣の祖先が残してくれた家屋も焼かれてしまった。19世紀の半ば頃、宣衣と一族の数人は家郷を離れようと決心し、海外行きの紅頭船の水夫となった。数年後、宣衣兄弟と従兄弟たちは貯めた金で自らの紅頭船を購入し、香港で輸出入会社の「乾泰隆」を設立した。創業初期、「乾泰隆」は東南アジアから米を仕入れ、且つ中国南方の特産品を東南アジアに輸出した。1870年代以降、陳氏兄弟は汕頭で「陳万利号」を、ベトナムのサイゴンで「乾元利号」を、シンガポールで「陳生利号」（後に「陳元利」と改名した）を、そしてバンコクで「(陳) 覺利号」を設立した。これらの会社は、「乾泰隆」を商業ネットワークの核心として、米や特産品・雑貨などを輸出入し続けた。それと同時に、生産や取引のコストダウンのために、乾泰隆一族はバンコクとベトナムで精米業に投資し、送金業にも参入した。会社の株主には拡大家族の中の他の成員が含まれたかもしれないが、各聯号への支配権は宣衣兄弟が握っていたという。

20世紀の初めに、各聯号はそれぞれ業務を展開し始めた。「乾泰隆」を中心とする企業グループは輸出入業をはじめ精米・送金業務を展開し・ノルウェーBK汽船の代理をつとめる一方、香港、シンガポール、タイの保険会社の重要なビジネスパートナーにもなった。また、タバコ製造業や不動産業など多分野の事業にも乗り出した。その間に、各聯号はさらに分号（支店）の形で各地に独自の商業ネットワークを構築し、よって多角的な商業ネットワークが生まれた。また、とくに1920年代には会社が数回もの統廃合を繰り返した結果、一部のメンバーが持ち株を手放し、会社への支配権はしだいに宣衣の長男の慈覺と彼の次男立梅の子孫の手に集中した。立梅とその息子がこれらの聯号の筆頭株主や董事になった<sup>11</sup>。まさにその時期に、郷民たちの中では、慈覺が支配していたバンコクの聯号である「覺利 Wanglee」が「乾泰隆」に取って代わり、この家族企業グループの「親会社」となったと見られている<sup>12</sup>。

19世紀末・20世紀初期、「乾泰隆」および聯号は異なる商業部門や地域でそれぞれ発展を遂げた。そのため、専門的または未熟な従業員をより多く雇わざるを得なかった。シンガポールの「陳元利」の内部組織を詳しく分析すると、1930年代に華人のプロ管理者（家長）だけでなく、海峡植民地に生まれたマレーシア人とインド人も雇ったことがわかる。しかし、会社への支配を維持するために、主要な財務ポストは、オーナーの直系家族員に握られていた。会社の中間層従業員の大半も親戚（母系と父系の親戚）や同じく潮州方言話者である。血縁・地縁関係のない業務管理者（家長）の収入は、中間層従業員の書記より十倍高いということは聞き取りを通して分かったことである<sup>13</sup>。にもかかわらず中間層従業員の多くは会社に忠誠心を持っている。バンコクにいる複数の情報提供者から、それは

<sup>11</sup> Choi, Chi-cheung (1998) "Kinship and business: paternal and maternal kin in the Chaozhou Chinese family firms" in *Business History*, 40(1): 34-36.

<sup>12</sup> 蔡志祥(2006)「企業、歴史記憶與社會想像：乾泰隆與覺利」『潮學研究』13号158-174頁。

<sup>13</sup> Choi, Chi-cheung (1998) "Kinship and business: paternal and maternal kin in the Chaozhou Chinese family firms" in *Business History*, 40(1): 34-36.

親世代から「鬻利」に恩を受けたからだと言われた。二つの「恩」を受けたという。まず、バンコクでは鬻利一族は家郷からの従業員に会社所有地に家屋を建てることを無条件に認めた。4000 人も宗族成員が住む「第二の家郷」と呼ばれるWattnam村はこのような経緯でできあがった。また、「鬻利」の創始者である慈鬻は、家郷の前溪で土地を購入し、長房の住居地として「新郷」を作った<sup>14</sup>。

つまり、1930 年以降、所有権と主な財務ポストは特定の継嗣の系統に集まる一方、会社の業務は家系と無関係なプロ管理者に多く任せていた。したがって会社が業務を拡大する際、忠実な親類も無関係な現地社員も両方採用したのである。

1940 年代の政治変化によって中国と東南アジア地域との関係はしだいに途切れていった<sup>15</sup>。「乾泰隆」および聯号は業務方針の変更を余儀なくされた。1949 年の中国、1975 年のベトナムの政権交代後、汕頭とサイゴンの聯号が相次いで閉鎖された。香港やシンガポールの業務も、中国市場の喪失や、政府がバックボーンにある競争相手（例えばシンガポール全国職員総会、香港五豊行など）に脅かされたために、衰退の一途を辿っていった。

一方、バンコク聯号の場合には、一族が香港の「乾泰隆」やシンガポールの「陳元利」の筆頭株主になり、また穀物を中心としたビジネスモデルを変更し、銀行・保険・ホテル・土地開発など直接に中国市場を頼らない多方面でのビジネス活動を展開した。中国向けの企業から、現地での影響力あるグループ企業（客家系の藍三Lamsam一族）および西洋資本と積極的に提携する企業へと転身した<sup>16</sup>。1945 年の日本軍占領時代に、会社の家長の陳守明が日本軍に協力したと思われ、左翼の華人に暗殺された。<sup>17</sup>藍三Lamsam一族の娘である守明の妻は、一族はもう華人コミュニティの活動に関与しないと明言した。したがって、この一族は中国との距離がしだいに開いていった一方で、より積極的に現地社会に溶け込み、特に現地のタイで本土化した非潮州系の裕福なLamsam一族とは方言の壁を超える関係を築いた。

1960 年代からは、香港やシンガポールでの業務が滞ってしまった。会社株を持っていた多くの株主が株を手放したため、会社の支配はいつそう少人数の慈鬻子孫の手に集中した。やがて本来、慈鬻の通帳名義だった「鬻利」は「乾泰隆」に取って代わり、親会社と見なされた。また、人為的に変えられない政治的原因により家郷との連係を絶ち、さらにバン

<sup>14</sup> 陳慶恒氏及びバンコク前美同郷会の会員、Wattnam 村の村人などへのインタビュー（1994 年 7 月 17-19 日）による。

<sup>15</sup> Chan, Wellington K. K. (1992), "Chinese business networking and the Pacific Rim: the family firm, roles past and present" in *Journal of American-East Asian Relations*, vol.1(2), pp.171-190

<sup>16</sup> 末広昭によると、バンコクの「鬻利」家族は客家系の藍三 Lamsam 家族との密接な結婚関係を持っていた。1930 年代には、両方の家族ともタイでトップ 5 に入る中国の家族にランクされた。Suehiro, Akira (1989) *Capital Accumulation in Thailand, 1850-1985*, Tokyo: the Centre for East Asian Cultural Studies, p. 112ff. 末広昭・南原真 (1991) 『泰の財閥』13 頁、297 頁以下、東京：同文館。

陳天中氏(立梅の孫)によると 元の精米工場の土地に建てられたロイヤルガーデン・リバーサイドホテル (The Royal Garden Riverside hotel) は、フランスの資本との合弁会社であった。(1994 年 7 月 18 日のインタビューによる。)

<sup>17</sup> Skinner, William (1957) *Chinese Society in Thailand: an Analytical History*, Ithaca, New York: Cornell University Press, p. 289 を参照。

コクでは華人コミュニティと日増しに疎遠になった。以上の二つの原因で、家族企業が新しい市場を見つけ、現地出身の従業員を雇い、海外と提携するようになった。つまり、中国との隔たりが会社の積極的な本土化、現地や海外パートナーと合資企業を共同経営する原動力となったのであった<sup>18</sup>。やがて、家族や故郷との関係も大きく変貌した。

## 2. 家郷関係の発展

McElderryが指摘したように、華人のネットワーク関係は家庭を核心とした多層構造をもつ「同心円」である。つまり費孝通が唱えた「差序格局」の世界である。家庭が同心円の核心をなしている。継嗣・親族・地域・職業といった関係から、担保や契約による取引まで波紋のように広がっていく構造を持つ<sup>19</sup>。核心に近ければ近いほど、メンバー間の信頼が篤い。信頼感が親族・姻戚・同郷・同一の公会の会員などのメンバーの間の取引を有効に促進した。ところが、信頼感とは、育てなければ育たない道德感情である。以下では乾泰隆一族の家郷への貢献が、それぞれの時期に「信頼」の育成への様々な要求にどのように応えているかについて述べる。それを通して、海外商人がいかに海外コミュニティの需要に応じて、血縁・地縁関係を調整してきたのかを明らかにする。

### 一、宗族と地方

前述のように、宣衣兄弟は饒平県隆都前溪郷の出身である。彼らは前溪の始遷祖である慧先の8代目の子孫で、饒平陳氏の始遷祖である世序の18代目の子孫でもある。14世紀後半の元朝末期に、世序が前溪から約1里離れた溪尾村に住み着いた。清朝初期になると、世序の多くの子孫が溪尾近くの後陳・竹宅・隆都麦頭園・海陽県西隴村などの村落に定住している。18世紀の初め、前溪で暮らしているのは4代目23人だけであった。彼らは同じ宗祖の房派ではなく、溪尾村から枝分かれしてきた拡大家族である。18世紀の初め、これらの村で世序を中心とする上位宗族 (higher order lineage) が結成された。祠堂・祖堂を建て、家譜を編纂した。前溪陳氏もこの世序を祭祀の中心とする上位宗族の一員となった。傍支の子孫は今日もなお溪尾宗祠で世序を祭っているという。前溪陳氏は溪尾と血縁関係があるだけでなく、地域同盟も結成した。1949年まで彼らと周りのいくつかの村とは、ある廟（溪尾古廟）を中心に地域同盟を結成した。この同盟は四つの系統があり、毎年、宗教活動を行う。この地域宗族の四つの系統のうち、二つは近くの朱氏であり、他は後陳

<sup>18</sup> 王綿長 (1997) 「泰華家族資本の一個典型：陳巒利」, 袁偉強編『陳巒利家族史料匯編』33-36頁, 汕頭: 汕頭華僑歴史學會。末広と南原によると、第二次世界大戦後、この家族のビジネスの焦点は、コメ産業から、銀行業や保険業、さらに1980年代以降は不動産開発事業へと移り変わっていった。(末広・南原(1991)『泰の財閥』13-14頁)。

<sup>19</sup> McElderry はそのような関係の構造について “Fiduciary community” という用語を使用。McElderry, Andrea (1995) “Securing trust and stability: Chinese finance in the late nineteenth century” in R. Brown (ed.) *Chinese Business Enterprise in Asia*, p.28, London: Routledge. 費孝通 (1947) 『郷土中國』20-30頁, 北京: 三聯書店を参照。

と溪尾二つの陳氏に属する。前溪陳氏は溪尾の系統に属する<sup>20</sup>。

前溪陳氏の地域宗族は慧先(1646-1709年)と三人の息子によって結成されたのである。慧先は紅頭船の商人として南北貿易に携わっていた。彼らの族譜によると、慧先の次男廷光は1732年に一族の倉庫を防御能力のある寨(永寧寨)に改造した後、陳氏親子は前溪に移住してきた。廷光は挙人に及第し、県令まで勤めた。村中でもっとも高い科挙資格と官位をもつ人物である。彼は、ダム・三つの文祠・一つの市場を建設するなど、力を惜しまずに社会福祉に貢献した。挙人に及第した60年後の1753年に、彼は82歳の高齢で再び朝廷の恩を賜り、鹿鳴の宴に招待された。廷光は前溪陳氏の中で唯一、地方志に記録される人物でもある<sup>21</sup>。廷光と兄弟二人は祠堂や祖堂の建設、家譜の編纂を通して陳氏上位宗族の成立に多に貢献した。廷光は宗族や地域でもっとも尊敬される人物である。1990年から数回にわたるフィールド調査において、廷光と慈鬢の二人は郷民によく言及される宗族成員であることがわかった。廷光が建てた永寧寨も地域における宗族の文化や宗教のシンボルとされている<sup>22</sup>。

慧先には三人の息子がいるため、子孫たちはそれぞれ三つの宗族房派に分かれている。宣衣が属する長房は、人口がもっとも多いが貧しかった。宣衣の三男慈雲が「恩貢生」に合格するまで、長房には科挙の高級資格の合格者がなく、数人の国学生しか出なかった。三房をめぐる資料は少ない。三房の人口は長房に及ばず、科挙試験の成績は二房に及ばないらしい。二房は廷光を房祖とし、永寧寨を宗族の中心とし、村でもっともパワーや影響力ある房派である<sup>23</sup>。分支毎に房祖を祭る祠堂があるが、始遷祖の慧先を祭る独立の祠堂はなかった<sup>24</sup>。言い換えれば、清初に廷光が宗族を立てて以来、18世紀末までに、三房には宗族を統合する気配がなかったといえる。清朝の半ば、水源・市場・械闘が原因で、前溪陳氏と後溪金氏・前溪許氏などの周辺の村の関係が非常に険悪となった<sup>25</sup>。そのとき、前溪陳氏が始遷祖の慧先の名義で共同資産を設けた。この共同資産や廷光の信望により、地域の宗族成員が団結し、ともに外部からの脅威に抵抗したことに繋がったと考えられる<sup>26</sup>。

つまり、清代において前溪陳氏の三房は競い合いながらも、外敵を防ぐために結束を求めていることが分かる。そして前溪村の外部に対しては、一部の村と血縁・地縁の関係を

<sup>20</sup> 拙稿(1995)「傳統的延續與變遷：潮州澄海縣隆都前美鄉的遊神」『寺廟與民間文化研討會論文集』，台灣：行政院文建會，下冊：671-690頁。

<sup>21</sup> 周碩勳纂修(1762)『(乾隆)潮州府志』28卷，47頁。

<sup>22</sup> 拙稿(1995)「傳統的延續與變遷：潮州澄海縣隆都前美鄉的遊神」、及び陳作暢(1993)「前美永寧寨」『澄海文史』29頁以下。

<sup>23</sup> 拙編(1995)『許舒博士所藏商業及土地契約文書：乾泰隆文書1：潮汕地區土地契約文書』，239-240頁，東京：東京大學東洋文化研究所文獻センター。

<sup>24</sup> 同上，238頁以下。

<sup>25</sup> 陳氏とその近隣との間で1840年から続いた水源の使用権についての紛争を解決するために、1890年に地元の県長によって建立された二つの石碑がある。これらの石碑は、前美村と後溪金氏の村の境界で発見された。

<sup>26</sup> 拙編(1995)『許舒博士所藏商業及土地契約文書：乾泰隆文書1：潮汕地區土地契約文書』237-38頁，239-40頁。

結ぶ一方、他の一部の村と競争し続けていた。地域宗族内部の三房の間で、あるいは周辺の村との間で、衝突しながらも同盟を結ぶ関係は、海外商人の家郷での活動にも影を落とした。

## 二、現地社会への貢献

### 1. 宗族の構築

乾泰隆一族の宗族形成への貢献は、祠堂や祖堂の建設、家譜の編纂に現れている。上述のように、饒平陳氏の初めての族譜は一族の最初の挙人である廷光が編纂したものである<sup>27</sup>。この族譜は宣衣の二人の息子、慈覺と「恩貢生」となった慈雲とによって20世紀初期に再版され、慈雲の「繡詩樓叢書」の第48編に収録されている<sup>28</sup>。再版されたこの家譜は次の部分から構成されている。

- (1) 慈覺と慈雲が執筆した序
- (2) 慧先（第11世；G-11）とその妻、廷光（G-12）、宣衣（G-18）とその妻、獻忠（G-14）、慈覺（G-19）、慈雲（G-19）、恵芳（立梅、G-20）、恵臣（G-20）と和征（庸齋、G-21）の画像または写真
- (3) 始遷祖の世序から十五世までの世系譜
- (4) 光緒二年宣衣とその妻の還曆祝の祝文。

20世紀の初期に宣衣や息子によって改訂されたこの族譜は、地域宗族のすべてのメンバーの系譜資料を示したわけではなく、宣衣一族に集中している。この家族を比較的上位の宗族と関連付けようとしながら、前溪の地域宗族の内部分化を強調していない。族譜は、前溪近辺の世序あるいは慧先の子孫と名乗る陳氏の人々を統合するためだけではなく、前溪内部の三房の長い間の険悪な関係を改善するためのものでもあった。前溪陳氏には九軒もの祠堂がある。乾泰隆一族は長期的に、世序と長房の祠堂の修繕に寄付している。「乾泰隆行」は毎年、村の祖先祭祀に銀元四千両（龍銀）を援助した<sup>29</sup>。1907年には、宣明や宣衣の父を記念するために古祖家廟を建てた。1920年代には宣明や宣衣を記念するためにそれぞれ家廟を建てた。1930年代には慈覺を祭る祠堂の建設が考案されたが、戦争によって中止された。このため、1920年から1940年の間における乾泰隆一族の家郷での活動は、長房と五家の関係（宗族房支、拡大家族）を強調することから、宣明と宣衣の二つの家族（直系家族）のことに変わった。

### 2. 再投資：市場、不動産、土地と軽工業

#### 土地と不動産

1867年から1949年までの間に乾泰隆一族が前溪とその近辺で行った148回もの土地売買

<sup>27</sup> 陳慈覺・陳慈雲（1920）「重刊陳氏族譜序」『（饒平）陳氏族譜』

<sup>28</sup> 黃坤堯編纂，陳步墀原著（2007）『繡詩樓集』31頁、香港：香港中文大學出版社。

<sup>29</sup> 陳慈雲編（1929）『鄉禮便覽』汕頭：名利軒石印參照。また、地元の歴史家陳作暢氏とのインタビュー（1991年8月27-29日）による。



の契約を検討すると、不動産を抵当に入れた2回の他は、すべて永久売渡の契約であった。これらの土地売買を通じて、1949年までに乾泰隆一族は家郷で少なくとも853.03ヘクタールの土地を購入したことがわかる。これらの土地の大半は、1883年に慈鬢が海外から家郷に隠居した後に購入したものである。148回の取引のなかでは、1件が慈鬢の父宣衣の名義で成約したものであり、慈鬢(1843-1821)の名義で成約した件数は23件、次男の立梅(1880-1930)の名義で成約したのは112件で、9件は立梅の息子の名義で成約したものである。つまり、これらの契約は立梅の主幹家族が締結したもので、土地の所有権はこの主幹家庭にある<sup>30</sup>。148回もの取引の78%は民国以降に成約したものである。1920年代、30年代は土地取引のピークと言える。この時期、潮州地域は1922年に珍しい自然災害に遭い、1933-34年の間に汕頭と潮州の農村部が世界金融危機の衝撃を受けた<sup>31</sup>。この二つの大事件で大土地や零細土地の多くの地主は土地を手放さざるを得なかった。代表的な例は、「乾泰隆」の香港及び東南アジアでの競争相手であった澄海市の「元発行」の高氏である<sup>32</sup>。乾泰隆一族は二つの危機を乗り越えただけでなく、1920年代には立梅が「乾泰隆」の筆頭株主となり、バンコク・シンガポール・汕頭の聯号の主な業務をコントロールするようになった。彼は、一番の競争相手である「元発行」の高氏に勝ち、土地を購入し、被災者のリアルな需要を満たしたことで、乾泰隆一族のために始遷祖の慧先や息子の廷光に匹敵する社会的評判を獲得した。郷民たちの目が慈鬢・立梅を慧先・廷光にかさねる理由もここから分かる<sup>33</sup>。

19世紀末までに、大半の土地売買は前溪村内で行われた。乾泰隆一族は本家の住宅(劉厝)を買い戻した上、五つの大家族の人々のために土地を購入した。20世紀の初め、地域宗族の人たちから購入した土地は、主に家廟(古祖家廟、1907年)と学校(承德学校、1909年と1912年)の建設に使った。村外で購入した土地は借地として貸し出し、地代は承德学校の出費に充てた。同時に、慈鬢は前溪の境界に新しい村を作り、長房の人々の住まいに使う予定を立てた<sup>34</sup>。1920、30年代、前溪村で所有する土地は主に、大型「四頭立ての馬車」構造の豪邸を建て、慈鬢の直系親族に住ませた。乾泰隆一族はさらに池を購入し、それを埋め立てて慈鬢を祀る家廟を建設する予定だった。慈鬢一族の成年男性のほとんどがバンコクに住んでいるので、これらの家屋は一族の女性に住ませるためのものである。一族は四人の管家を雇い、家屋や地代の管理を委ねた。慈鬢の義理の息子(長男)を除き、

<sup>30</sup> 拙編(1995)『許舒博士所蔵商業及土地契約文書：乾泰隆文書1：潮汕地區土地契約文書』、246-48頁。

<sup>31</sup> 陳春聲(1933-34)「八二風災風災所見之民國初年僑鄉」『潮學研究』6巻369-395頁の金融危機については、饒宗頤(1949)「金融志」『潮州志匯編』を参照。

<sup>32</sup> 高氏は、19世紀の終わりから1934年まで潮州のエリアで最も裕福な家族の一つであった。彼らはまた、香港元発行会社(Yuanfa hang company)及び東華病院の創設者だった。地元の話によると、宣衣は彼自身のビジネスを開始する前に、元発行会社の創業者が所有する船で働いていた。林熙(1983)「從香港的元發行談起」『大成』第117至121號、香港大成出版社。

<sup>33</sup> 陳作暢・陳璇珠編(1991)『前美陳氏惠先公族譜』の「前言」参照。

<sup>34</sup> 陳作暢氏とのインタビュー(1991年8月27-29日)による。また、拙編(1995)『許舒博士所蔵商業及土地契約文書：乾泰隆文書1：潮汕地區土地契約文書』に収録された土地契約書を参照。

他の三名の管家はすべて前溪以外に住む遠縁の親戚である。前溪と溪尾村の村民の記憶によると、1952年に前溪と溪尾村のほぼすべての村民が慈覺一族の小作農だった<sup>35</sup>。この地主一小作農の関係は、慈覺一族と村民との溝をいっそう広げた。

乾泰隆一族と村民の間の隔たりは、地主対小作農の緊張関係だけではなく、一族が故意に村民と距離を置いたことによる部分もある。慈覺一族をめぐる噂やでっちあげが溝をさらに広げた。例えば、毎年の祝祭日にこの一族は、他の村人のように廟に行ったり、または神輿神幸行列が通る際に、自宅の門前で香案（線香を設置する台）を設けて神に祈ったりすることをしなかった。一族の人々が参拝するために神幸行列が神輿を担いで豪邸に入った、などである。また、もう一つの死や葬式をめぐる物語も一族と村人の階級差を表している。1921年、慈覺が死去し、その死体は「棺材屋」と呼ばれる特別の石屋の中に置かれた。死体は「棺材屋」に15年間も保管され、風水のよい土地が見つかるまでずっと埋葬されなかった。1936年に行われた葬式は、幡が舞い楽隊が演奏し、まるで盛大なパレードのようだった。郷民は豚の頭や尻尾を載せた皿を持って拝みに来さえすれば、二枚の銀元が貰えた。多くの村民が金欲しさに管家（地主の家の執事）に見つけられるまで同じ供え物を持って何回も行列に並んだという。郷民の言葉からは、「棺材屋」や葬式の過程に対する遠く離れた恐怖感や感服の気持ちが伺える<sup>36</sup>。慈覺一族と郷民の緊張関係は1930年代に更に一段と高まった。郷民から見れば、四名の執事のうち慈覺の息子を除く三名に、外村からの遠縁の親戚が選ばれているのは、一族の財産の秘密を守るためであった。「四頭立ての馬車」構造の豪邸は、一族と郷民を分断した。1930年以降、慈覺一族は神秘的な存在となった。

### 市場と軽工業

土地投資のほかに、乾泰隆一族は家郷の二つの企業にも投資した。20世紀初期に五つの拡大家族の12人が共同で前溪に「利生布廠」を、龍都に「牛墟」を設立した。二つの企業の資本金の一部は宗族堂産の地租から捻出されている。企業利益はすべて村の福祉・共同資産の購入・村の冠婚葬祭に必要な楽隊の設立・宗教活動（ドラゴンボードなど）の協賛に使ったという。1930年代の工場閉鎖の直前には、17もの株に分かれ、中に慈覺一族が管理しているものは12株もあった。工場と「牛墟」の閉鎖は日中戦争と関係があると、郷民はいう<sup>37</sup>。しかし、1934年の金融危機以降、家郷の企業が乾泰隆一族に引き続き投資してもらえなかったことも原因の一つと考えられよう。

### 3. 慈善活動

<sup>35</sup> 地元の長老へのインタビュー（1991年8月）、及びバンコクにおける前美同郷会のメンバーへのインタビュー（1994年7月19日）による。

<sup>36</sup> 前美村の老人組（オールドメンズ協会）へのインタビュー（1990年8月25日）による。同じ物語は、それ以来、私の訪問中に何度も語られていた。

<sup>37</sup> 陳修武、作暢などへの1992年8月11日のインタビューによる。

20世紀初期、一族は村や地域に多くの貢献をした。1907年、一族が古祖家廟で新式教育の小学校を設け、村中の子供を教えた。1911年以降、この小学校は隆都からの子供も受け入れた。学校経費は主に陳氏宗族の不動産収入や利息から捻出されている。学校の初代校長の陳庸斎は、宣衣の曾孫である。庸斎は1923年に家郷を離れて香港に出て、香港皇仁書院を卒業した<sup>38</sup>。1941年太平洋戦争の勃発まで、一族は毎年平均4000銀元を学校教育に使った<sup>39</sup>。一族は現地の教育に尽力するほかに、自然災害の被害者にも金銭を寄付した<sup>40</sup>。例えば、

(1) 1908年台風と洪水により潮州地域の農田や家屋が大規模に破壊された。慈巒の兄弟慈雲は三十首の詩を詠み、シルク製品を作らせ、競売に出品した。その所得は被災者に配られた。この行動によって、慈雲が清政府から「繡詩楼」という扁額を賜られた。後に慈雲は「繡詩楼」という名を自分が出版する叢書の命名に使っている。

(2) 1909年、一族は長江デルタ水害の被害者に寄付した。清王朝から「大夫」「通奉」などの皇朝称号を与えられた。それらの称号が後に一族の家屋に名づけられた。

(3) 1918年、潮州市で西暦851年以来最大と言われる大地震が起き、千軒以上の建物が崩壊し、数え切れない死傷者が出た。一族が隆都のダムや灌漑システムの修復に巨額の資金を寄付した。

(4) 1922年、潮州が激しい台風災害に見舞われ、十数万人の命が奪われた。一族は寄付だけでなく、死者埋葬をも手伝い、さらに親類のない死者を埋めるために義塚を建てた。

(5) 1939年、一族は凶作に遭う農家に穀物を寄付し、海外で暮らしを営む郷民の生活を援助した。「乾泰隆」及び香港・バンコク・シンガポール・サイゴンの聯号は新移民に宿や食事を無料提供した。例えば、1923年、一族と血縁関係のない陳穆乾は、1921年からシンガポールの「陳元利」で働く父を探しに潮州市からシンガポールを訪ねてきた。当時12歳の穆乾は会社に勤めたわけでもないのに、父と一緒に無料で会社の2階に住まわせてもらい、その上、二年後に学校を卒業し他の会社に勤めるまでの間、会社から毎月2元の手当てを受け続けていた<sup>41</sup>。これは特別な例ではないようである。陳作暢が指摘したように「1949年以前、前溪と居美村のほとんどの家庭には海外で働く人がいる。その多くは「巒利」に勤めているか面倒を見てもらっている…」と<sup>42</sup>。

#### 4. 士紳身分の向上

前溪陳氏には科挙の初級身分を持つ人が多くいるが、上級資格を持つのは二房の廷光だけである。廷光ゆかりの永寧寨・文祠・様々な宗教活動は、廷光が郷民に尊敬される文化的なシンボルとなっている。廷光のおかげで王朝国家に守られている、と郷民は思ってい

<sup>38</sup> 氏の伝記については潮州商會編(1951)『旅港潮州商會三十周年紀念特刊』を参照。

<sup>39</sup> 陳作暢・陳璇珠(1990)「陳巒利家族郷情實錄」『澄海文史資料』5巻53頁。

<sup>40</sup> 陳作暢・陳璇珠(1990)「陳巒利家族郷情實錄」『澄海文史資料』5巻55-58頁。

<sup>41</sup> シンガポールの陳穆乾氏へのインタビュー(1993年7月18日)による。

<sup>42</sup> 陳作暢・陳璇珠(1990)「陳巒利家族郷情實錄」『澄海文史資料』5巻59頁。

る。宣明・宣衣兄弟が属す長房には有名な祖先がいない。しかし、海外でのビジネスが順調になるにつれ、王朝帝国から名誉を獲得しつつあった。一族の人々は慈善活動を通して王朝から様々な封贈を与えられた。例えば「大夫」「通奉」「郎中」などの封号が一族の邸宅の命名に使われた。村では、延光と宣衣兄弟家族の屋敷にだけ王朝の称号が掲げられている。豪華な建物や帝国の封号が郷民たちにこの一族の地位の貴さを知らしめている。

寄付や慈善活動を通して王朝から称号を与えられたこと以外に、一族は村で二人目の科挙の上級試験の及第者を育てた。1909年に慈雲が「恩貢」の身分を獲得した。慈雲は1905年から亡くなる直前の1934年まで香港乾泰隆の総司理を勤めた。会社の代表として何回も潮州商会の副主席と香港華人最高機構の東華病院の委員を担任した。詩人・書家・文化パトロンとしての彼は、19世紀末・20世紀初期に香港の文人集団の活動に精力的に参加した。この集団のメンバーに温肅、頼際熙、陳伯陶など清末の高級官僚や進士がいる。彼は人脈ネットワーク・科挙合格者の地位・商業的立場によって「儒商」の美称を得た。慈善活動で彼は何回も清朝と民国政府から封贈を授かった。国家の封号・公共建設・封号の扁額の掲げる屋敷・文人交遊のネットワークは、一族の家郷での紳士としての象徴を作り出す一方、香港及び東南アジア各地の商人ネットワークで尊敬される「儒商」という美称をもたらしたのであった<sup>43</sup>。

### 3. 商人の家郷連系の解釈

上述のように、1850年から1870年の間に、香港で業務を展開した乾泰隆一族の家郷での主な行動は、住宅や住宅用地の売買や農業用地の買戻しであった。つまり、この時期の乾泰隆一族の家郷での貢献は、大家族の経済基礎を改めて築き上げたことである。1880年代以降、乾泰隆一族は業務を急速に拡大させ、各国で聯号を設けた。それと同時に一族は下記の貢献を通して郷民から尊敬を得た。(1) 宗族の家譜の編纂、(2) 地域宗族と長房の祠堂の建設、(3) 科挙試験や慈善活動への参加により皇朝国家からの資格と褒美の獲得、である。19世紀末、慈覺が家郷の前溪に隠退したことで、一族は宗族に限らず、地域社会への貢献にも力を入れた。彼らが設立した学校は、宗族の人々に限らず、周辺の村にまでその恩恵を施した。彼らが長房の子孫のために新郷を作っただけでなく、墟市や工場も作り、利益を村の福祉に使った。つまり、海外業務が急激に発展していた時期に、乾泰隆一族が宗族や地域社会で中心的な立場を得るために巨額資金を投じたのである。また国家との関係を利用して文化的地位も獲得した。同じくその時期に、この拡大家族のメンバーが宗族・地域社会のリーダーとなった。慈覺は郷里にいたとき郷長に選ばれ、後任者となった文士も5つの拡大家族の一員である。慈覺と養子の恵臣は相次いで長房の房長になった。

「乾泰隆」や聯号は、1930年代から大きな統廃合を経験し、会社への支配権はしだいに

---

<sup>43</sup> 蔡志祥「清末民初香港潮汕商人的文化交遊與網絡建構：陳子丹與清末遺老」台湾史研究所編『比較視野下的臺灣商業傳統』（編集集中）

特定の継嗣系統に集中した。会社の組織改革には家庭関係の変化が映しだされた。20世紀に入ってから、慈鬘と子孫が前溪に立派な豪邸を建てた。1920年代から30年代にかけて「四頭立ての馬車」構造の四軒の豪邸を建てた。それは25400平方メートルの土地を占め、506の部屋がある。建築材料は中国・東南アジア・ヨーロッパから調達されてきた<sup>44</sup>。しかしすべての部屋が入居されてはいなかった。また同時期に、慈鬘の子孫が地域宗族の祖堂の池を買い、慈鬘の家祠を建てるため埋め立てる予定だったが、中日戦争勃発の影響で実現できず、祠堂は後にバンコクに建てられた。ちょうどその時期に、一族は倒産した親族から土地を大量に買い漁った。1920年代の自然災害や1930年代の経済危機により一族の土地所有が急増し、それによって一族と郷民の間の社会的・経済的な差ないし郷民との距離が拡大する一方であった。

中国と東南アジアの1930年以降の政治変化は一族と郷人とをさらに遠ざけた。20世紀後半、会社が重んじてきた文化資源はだんだん効果が薄まった。乾泰隆一族と家郷との関係が、家族的な関係から宗族的な関係へと変化したことも、海外の商業管理を一変させた。また1930年代以降、輸送コストが急激に高騰した上、中国と東南アジア国家は移民管理に厳しくなり、出国・入国手続きはともに難しくなった<sup>45</sup>。1945年、立梅の息子で鬘利の頭家の守明が暗殺され、その妻は、今後一族はいかなる華僑社団の活動にも関与しないと明言した。一族のタイ本土化が進み、タイの上流社会における地位の確保に力を入れた。

内外の変化は海外商人と家郷の連係に新たな意味を付与した。1994年、前美区の幹部は200万を超える香港ドルの寄付金の取得に成功した。その中の多くは海外からの寄付である。バンコクの鬘利一族の寄付金だけでも800,000香港ドルにのぼり、他の寄付金を遥かに上回った。1992年以降、五つの家族成員の一人を含む地方幹部は、三回タイを訪れ、家郷建設、村の福祉改善への寄付を鬘利一族に要請したが、三回とも鬘利一族に断られたという。しかし、前美郷からのほか二人のタイ僑商がそれぞれ40万を学校建設に寄付したことで、鬘利一族が寄付に乗り出した。現地の人々は、鬘利一族の寄付が愛国や郷里愛によるものだと喜んで解釈しているが、タイの四代目の華僑としての鬘利一族のリーダーにとって、タイ社会と比べると、家郷との連係は二の次なのである。彼らの寄付は、タイの華僑商人への対抗・タイ社会にある慈善家イメージ・タイ華僑の中で商業や地域社会のリーダーとしての地位を保つためである。40万を寄付した二人とも一代目の移民である。二人は溪尾からの陳氏と前美郷の朱厝からの朱氏である。彼らはタイに移住する前は貧しい小作農だったが、タイで商人として成功し、10億ドルの資産があると自ら述べている。二人は前美郷に生まれ育ち、若い頃にタイに移住した。19世紀後半にタイ華僑や皇室との婚姻関係を

<sup>44</sup> 陳作暢・陳璇珠(1990)「陳鬘利家族郷情實録」51頁。蔡英豪編(1987)『澄海縣文物志』,57-58頁,澄海:澄海縣博物館。

<sup>45</sup> 『南洋商報』(1933年2月14日)の移民の制限についての記事によると、新たな規制には以下の内容が記載されていた。(1)20歳以下の移民は両親と一緒にタイを入れることが必要であること、(2)12歳を超えた人たちは、タイ語または自国の書き言葉のどちらかを理解しなければならないこと、(3)入国料を30パーツから100パーツへ値上げすること。また、1939年5月20日及び8月17日の、J. Crosby氏とViscount Halifaxとの間の通信を参照。(Public Records Office, London, BT11/990)

利用して社会的な名誉や地位を築いていく鬻利一族と違い、彼らは社会の基層から勤勉に働き、自分の企業を作り上げたのである。鬻利一族の家郷への寄付は、遠い祖先の家郷との関係を再構築するよりも、むしろタイ華僑の中の地位を守る宣伝のための作戦に過ぎないと考えられる。

総じて言えば、家族企業は設立初期には規模が限られており、従業員の供給は主に拡大家族に頼っていた。その間、彼らと家郷との関係の着眼点は主に地域宗族や地域社会における家族の社会的・経済的地位にあった。会社規模の拡大・業務の多元化により、会社と聯号の管理や所有権が変化し、より多くの社員が必要となった。また、ライバル企業との競争が一層激しくなる中、会社の各分野で活躍できる忠実な社員がより多く必要となった。この拡張期において、海外商人は業務開拓のために文化資源を広く拓いた。そこで家郷での社会・文化活動も家族への関心から地域宗族や地域社会への関心が変わった。1920年以降、会社が大規模な内部統廃合を経験し、企業の支配権はしだいに立梅の子孫の手に集まった。彼らは皆バンコクで生まれており、親世代の中国の家郷を懐かしむ気持ちはなかった。この気持ちの冷たさは、経済・社会的地位の差によっていっそう進んだ。それと同時に、特に東南アジア地域の政治的空気は、現地生まれの華人の帰化を促す一方、家郷からの郷里の親類ではなく、現地出身者を雇う傾向を強めた。したがって、海外商人にとって、以前のように家郷での貢献を通して拓いた社会的名誉・家郷関係によって強めた商業ネットワークは必要でなくなった。これらの海外商人は、遠い宗族の一員として祖父や父親世代のような家郷への貢献を自己の責任にするとも思わなくなった。乾泰隆陳氏をめぐる研究を通して、海外商人と家郷の関係は、継嗣の身分・商業活動の発展（拡張または縮小）・マクロの環境の変化に影響されることが明らかになった。商人の家郷への貢献は、感性的、無償な慈善活動に限らない。信頼・忠誠といった文化資源は海外華商が成功する上で重要な要素であり、家郷はこれらの文化資源を育む最適な場所である。しかし、乾泰隆一族の例を通して私たちが分かるのは、このような文化資源と家郷関係は切断しても構わない戦略にすぎないということである<sup>46</sup>。

---

<sup>46</sup> Casson, Mark (1991, 1997) *The Economics of Business Culture*, Oxford: Clarendon Press.